

心学道話を加工した明治前期の 日本語教材における上方語の扱い

——言語規範の新旧交代に外国人はどう向き合ったか——

松 本 隆

要旨 明治の初めから半ばにかけて、心学道話を日本語学習用に加工した教材が相次いで出版された。この時期は、上方語の威信が失墜し、それに代わり東京語に基づく標準的な日本語が形成されていく時期と重なる。小稿は『鳩翁道話』や『心学道の話』を素材とする教材5種の調査をした。両素材は講述筆録であるため話し言葉を学ぶのに向く反面、幕末の刊行で上方語の特徴が濃厚なため新時代の標準モデルにふさわしくない面もある。これら要注意な表現に対し、各教材は注釈を加えたり、上方的でない表現を本文に選ぶなどの処置をとっている。各教材の上方語に対する姿勢は刊行時期によって異なる。早い時期の教材は、東西の言語的な差異を念頭におきつつも、上方語を依然有力な同時代語と捉えている。いっぽう刊行時期が遅くなると、東京語に重心が移りそこを基軸に、距離をおいて上方語を観察する姿勢が変わる。西から東への言語規範の推移は、表面的には刷新に見えるが、根幹においては継承であることを、教材編者から見識ある非母語話者は心得ていた。そのため旧来の素材からでも新時代に対応しうる言語形式を吸収できたのである。

キーワード：明治前期の標準日本語、東京語、上方語

Western Dialectal Expressions in Japanese Language Texts, Based on the Shin-Gaku Dō-Wa (Heart-Learning Ethics Moral Discourse), Published in the First Half of the Meiji Era.

——How foreigners kept up with the trend of replacing old language forms with the new——

MATSUMOTO Takashi

Abstract From the beginning of the Meiji Era to the middle, Japanese language texts which processed the Ethics Moral Discourse were published in succession. During this period, the prestige of the Western dialect was lost, and it overlapped with the time when standard Japanese based on the Tokyo dialect was formed instead. This paper investigates five kinds of texts which processed “Kyū-Ō Dō-Wa”

(Kyū-Ō's Ethics Moral Discourse), or “Shin-Gaku Michi-no-Hanashi” (Heart-Learning Discourses on the Path of Morality) as materials. They are suitable for learning spoken language because both discourses are the records of lecturers. However, they are not good for standard Japanese models of the new age, because they are publications of the late Tokugawa period and are richly-laden with the Western dialect. Each text took measures to cope with dialectal expressions, such as attaching explanatory notes to the main texts, or choosing non-dialectal words and phrases for the main texts. The attitude of each text to the Western dialect differs generally depending on the publication time. Early period publications recognized the Western dialect as a contemporary prestigious language while keeping in mind the linguistic differences between the east and west. On the other hand, later period publications recognized the center of gravity had shifted to the Tokyo dialect, and showed the attitude of observing the Western dialect from a remote location. The insightful non-native speaker, such as the text editors, knew that the shift of the language norm from the old west to the new east seemed to be a revolution superficially, but was fundamentally an inheritance. Therefore, they were able to absorb language forms suitable for the new era even from old materials.

Key words: Standard Japanese in the First Half of the Meiji Era, Tokyo Dialect, Western Dialect

1. 日本語学習素材としての心学道話、その長所と様々な利用方法

江戸後期に隆盛した心学道話は、儒教思想をもとに仏教や神道の考え方も折衷し、大衆にむけて人生哲学や道徳を諭す説教である。説教といっても堅苦しさとは無縁で、落語のような娯楽性を備えており、話芸と呼ぶにふさわしい。

幕末から維新にかけて日本研究の先駆をなした英国公使館員のアストンは「Shingaku (Heart-Learning) Sermons」を楽しい読み物として推奨し、とりわけ「The best are the collections entitled *Kiūō Dōwa*, *Shingaku Dōwa*, and *Teshima Dōwa*. Of these the *Kiūō Dōwa* is undoubtedly the most amusing. Indeed, it may safely be said that few more entertaining sermons are to be found anywhere.」(Aston 1899: 342-344) と解説する。心学道話のなかでも、道話の名人として誉れ高い柴田鳩翁の『鳩翁道話』を格別に称賛している。その次の「*Shingaku Dōwa*」は小稿であとに取り上げる『心学道の話』のことで、また「*Teshima Dōwa*」は手島堵庵の「坐談随筆」など口語体作品をさす。

アストンおすすめの『鳩翁道話』より壺之上(柴田1834)の前置きの一節を資料1として下に引用する。

【資料1】柴田鳩翁『鳩翁道話』壺之上、第二丁表～裏、天保5（1834）
年跋

心学道話は識者のためにまふけました事ではござりませぬ。たゞ家業におはれて隙のない。御百姓や町人衆へ。聖人の道ある事をおしらせ申たいと。先師の志てござりまするゆゑ。随分詞をひらたうして譬をとり。あるいはおとし話をいたして。理に近い事は神道でも佛道でも。何でもかでも取こんで。おはなし申す。かならず輕口ばなしのやうなど。御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども。たゞ通じ安いやうに申すのでござります。

引用の4行目に「おとし話」という言葉が出てくるが、落語と心学道話は共通する要素が多い。5～6行目で「輕口ばなしのやうなど。御笑ひ下されな」と言いつつ、実はこのあと小咄のような譬え話をさまざま繰り出して聴衆の笑いを誘う名調子が続く。心が和んだところで譬えの真意を論し、自省へと導くのである。会衆は、我が身のことで、道話の世界に引き込まれていく。

「～でござります」基調の地の文は、一対多のやや改まった丁寧な話し方で、かしこまらず偉ぶらず親近感を抱かせる。心学道話には、武士から丁稚まで多彩な人物が登場し、色々な場面で様々な会話を展開する。口調までも忠実に筆録した口語体の心学書は、状況に応じた話し言葉を学ぶ絶好の素材になりえた。

先のアストンと同じ英国公使館員のサトウも、心学道話で日本語を学んだ一人である（金沢2013）。幕末に來日後まもなく、横浜で米国人宣教師ブラウンから『鳩翁道話』などを教材に日本語を学び（Satow 1921: 57）、明治に入ってから後進の学習に心学書をすすめている（Satow 1881: 16-22, 45-52）。

心学道話をいち早く英訳して海外に紹介したのはミットフォードである。1871年 ロンドン刊 *Tales of Old Japan*. 下巻に「The Sermon of Kiu-ô, Vol. I. Sermon I-III.」として『鳩翁道話』壺之上から式之上までの3席を英訳し（Mitford 1871: 136-189）、その前に解説「Japanese Sermons.」（同125-135頁）を加えた。

心学道話を日本語教材に加工した嚆矢はオニールがロンドンで出版した *Kiu-o Do-wa. Ni no Jo.* (O'Neill 1874) である。国内ではイビーの *Kiuô Dôwa: Ichi no Jô.* (Eby 1881) が最初である。オニール版は漢字仮名交じり木版和本を読む教材、ローマ字に転写したイビー版は実用的な口語表現の速習を謳う。のちにイビーは壺之下も加えた増補改訂版（Eby 1892）を出版し、その序文で1881年版の好評ぶりに触れており、需要の高さがうかがわれる。また柴田鳩翁以外にも、奥田頼杖の道話『心学道の話』が教材化されている（Knox 1882, Imbrie 1889）。

森岡（1980）は、心学道話の地の文に注目し「中立性の高い口語」つまり「方言的特色が稀薄で、位相性もなく〔中略〕当時における共通語に基づいた言文一致体」であるとし「道話体」と名付けた。心学道話が日本語教材として歓迎されたのは、会話文から状況に応じた様々な話し方を学べると同時に、地の文には外国人が習得すべき標準的な語り口のモデルが示されていたからである。

2. 心学道話の上方表現をとりまく言語的な時代背景の変化

しかし、政治・経済・文化の中心が東京に移行すると、心学道話に含まれる上方的な表現は次第に規範性を失い、やがて古びて見えるようになってくる。明治期3大英字紙のひとつ *The Japan Weekly Mail*. は1881年8月6日の書評欄で、イビー編 *Kiuō Dōwa: Ichi no Jō*. を取り上げ「... in a volume designed to aid in “the rapid acquirement of a use of the colloquial sufficient for practical purposes,” no warning is given against such antiquated or provincial words as *ja* and *gorōjimase*, which would either not be understood, or, if understood, would raise a laugh among the bystanders.」と批判した。「～じゃ。」や「ご覧じませ」に代表される、古くて非標準的な表現についての注意喚起がないと苦言を呈する。京都から全国に広まった心学道話は、上方語系の特徴が濃厚なのである（山口1965、金沢2013）。

この批判に対し、イビーは *The Chrysanthemum*. 誌1881年10月号に「Criticism in the East.」（通巻385-391頁）と題する記事を寄せて「I would say that I have heard “*ja*” and “*gorōjimase*” within the last few days, both perfectly understood and not the sign of “a laugh among the bystanders.”」と反駁し「じゃ」や「ご覧じませ」が現用の表現であるとした（同誌のURLは参考文献Satow 1881参照）。

しかし「じゃ」は江戸後期の文芸作品では、すでに老人や武家の人物像を造形する特徴的な言葉づかいであった（古田1987、金水2003: 24）。また1886年の加藤弘之による演説の速記録に記された「……即ち国民と云ふことぢゃ。」に対して「加藤先生がそのようにジャのお好きなお方なることは、はなはだ疑わしきところなり」「筆記ノ儘トハ思ハレヌナリ」等の批判が寄せられており、明治前期には耳につく表現になっていたことがわかる（森岡1991: 16, 57）。

The Chrysanthemum. 誌上で「じゃ」や「ご覧じませ」を現用の表現として擁護したイビーであるが、その言葉とは裏腹に、自身の著作『眞の生命』^{（マコトイのち）}（イービー1884）にはこれらの表現がみえない。つまり古びて標準的でなくなった要注意な表現を避けて、日本語の近代化を図っているのである。

前時代の古い素材から、新たな時代の標準的な日本語を、当時の外国人はい

かに学び得たのか。言語規範の新旧（東西）交代の過渡期にあつて「antiquated or provincial」になっていく要注意な表現に、かれら学習者はどう対処したのか。次の第3節では、江戸と明治の同種の講義物にみる表現の異同を比較する。第4～7節では日本語学習書内で要注意な表現をどう扱っているかを観察する。

3. 幕末の『鳩翁道話』から明治前期の『眞の生命』に至る講義物の連続性と不連続

『鳩翁道話』を教材化した宣教師イビーは、同じ時期に『眞の生命』というキリスト教書を出版している。これはイビーが十戒について日本語で行なった一連の説教を、坂本安吉なる筆録者がそのまま聞き書きした記録である（松本2017a）。1880年から82年にかけて分冊版を順次刊行、1883年に合本にまとめた。分冊版の副題「一名聖教講義記聞」からも『鳩翁道話』と同種のいわゆる講義物だとわかる。イビー自身も日本語学習に用いたであろう『鳩翁道話』と、学習の大成ともいふべき『眞の生命』を比較すると、日本語表現の共通点と相違点、連続性と不連続に気づく。資料2を、先の資料1と見比べてみよう。引用したのはモーセの十戒のうち第八戒「盗倫こと勿れ」に関する譬え話である。

【資料2】 イービ『眞の生命』第7卷9頁、1884年刊行の合本版による
たとへば茲に一人の愚者が金の時計を持て居て自分では全く眞鍮と心得
て居るを汝がさぐり知て眞鍮文の僅な代價を拂て御買取なさるれば汝は
其人を欺き盗みたるつみでござりますまた或人が借財があつて返済の期
限が來り是非とも金二百圓今日無てはならぬとはいふぞその人が地價
五百圓の屋舗をもつて居るを汝がしつて其屋舗を二百圓で買てやらふ
と御云ひなさるればその人は直に金が入用の場合ゆゑ據無其屋舗を賣
渡しませう然らば汝は一寸の間に三百圓の利潤を成されませうけれど
も人の難儀を見込己の貪慾を營りますゆゑ此おいましめに照準しますれ
ば矢張り盗む譯になります〔下線は稿者・松本による、以下同〕

先の資料1『鳩翁道話』と同じく、資料2『眞の生命』も丁寧な「～でござります」に代表される「道話体」を基調に一对多の説教を進めている。しかしここに「～じゃ。」は見られない。過去の素材に盛り込まれた表現を取捨選択し、新たな時代に通用する表現を継承する一方、古びたり標準的でなくなった要素を除外している。もちろんイビーには『鳩翁道話』以外の学習素材も当然あったわけで、直接の影響関係を論じることはいふまでもないが、江戸末期から明治前期

にかけての講義物の文体変容を知る手がかりとして取り上げる価値はあろう。

資料2の細部を見ると、2行目に「代價^{がい かい}を拂^{はら}て」、5行目に「二百圓^{に ひゃくえん}で買^かて」があり、動詞のウ音便と促音便の両形がみえる。また2行目の「知^して」と5行目の「しつて」のように、同じ動詞のテ形として非音便と音便形を併用する場合もある。ただし本書全体では「拂^{はら}て」や「買^かうて」のようなウ音便化の事例はごく少ない。東日本型の促音化が進んでおり「買^かて」や「しつて」のような語形を中心として、そこに「知^して」のような原形が混じってくる。

西日本と東日本を分ける指標になる表現として、(1) ア・ワ行（文語のハ行）四段活用動詞の連用形の音便、(2) 形容詞連用形のウ音便と原形、(3) 打ち消しの「ぬ／ん」と「ない」、(4) 断定の「じゃ」と「だ」の対立などがよく知られている。『鳩翁道話』と『眞の生命』をこの観点から比較してみたのが下の資料3である。『鳩翁道話』は壺之上全体（約7,400字）を調査対象とし、『眞の生命』は全7巻中いちばん分量の多い第3巻（約6,400字）を標本に選んだ。前者は経書を、後者は聖書を引用して講釈を繰り広げているが、それらの引用文（文語体）は調査対象から除外した。

【資料3】『鳩翁道話』壺之上と『眞の生命』第3巻の東西語法比較

	(1) 動詞の音便			(2) 形容詞		(3) 打消		(4) 断定	
	ウ音便	促音便	原形	ウ音便	原形	ヌ	ナイ	ジャ	ダ
鳩翁道話	16	31	1	21	8	28	0	42	0
眞の生命	0	38	4	1	4	23	12	0	4

ここからわかるように『眞の生命』は、(1) ア・ワ行（文語ハ行）動詞連用形のウ音便、(2) 形容詞連用形のウ音便、(4) 断定の「じゃ」を、ほとんど用いない。それに代わり、(1) 動詞の促音便、(2) 形容詞の原形を用い、(4) 文末を「～でござります」等の丁寧な表現で終えている。かつて規範とされた西日本型から、新標準となる東日本型への移行が見られるのである。

4. 『心学道の話』3種テキスト間にみる東西の表現対立

第4～7節では、心学道話の加工教材における西日本型の要注意な表現の扱いを観察していく。加工すべき元の素材に要注意な表現が含まれる場合の処置として、問題の箇所を書き換える方法と、本文はそのまま手を付けず別に注釈を施す方法が考えられる。第4～6節で前者を、第7節で後者を取り上げる。

まず本節では、奥田頼杖の『心学道^{みちがくどう}の話』と、その加工教材2種を比較し、東西両表現の異同を概観する。ノックスとインブリーは、それぞれ『心学道の話』内の逸話を教材に加工した。ノックスは、基本漢字の学習を視野に入れて、21話を抄録した活版の和本を編んだ。インブリーはそこからさらに9話を厳選しローマ字転写した本文に注釈を加え、自身の日本語文法書の巻末付録とした。

下の資料4は、奥田とノックスとインブリーの3者による『心学道の話』（奥田1842、Knox 1882、Imbrie 1889）の本文にみる相違点のうち本論に関する特徴的な語句を拾い出したものである。調査には稿者が以前に作成した基礎資料（松本2017b付録③）を用いた。

【資料4】『心学道の話』3本間の特徴的な相違点

	(1) 動詞の音便		(2) 形容詞の音便			(3) 打消
奥田頼杖 ¹⁸⁴²	したがふて	遣 ^{つか} ふて	能 ^{よふ}	ゑろふ	なふ	たまらぬ
ノックス ¹⁸⁸²	隨 ^{したがつ} て	遣 ^{ツカフ} て	能 ^よ く	えらい	なく	たまらなく
インブリー ¹⁸⁸⁹	shitagatte	tsukatte	yoku	erai	naku	tamaranaku

奥田の『心学道^{みちがくどう}の話』を基準として、ノックスとインブリーの本文を眺めると、西日本型の語法から離脱していく傾向が見て取れる。

(1) 動詞の例えば「したがふ」についてインブリーは「seichō suru ni shitagatte」のように促音便化し、同じくノックスも促音便の「隨^{したがつ}て」を用いている。しかし奥田はウ音便の「したがふて」になっており日本語教材と異なる。同様に「つかふ」では、奥田が「遣^{つか}ふて」とウ音便になっているが、インブリーでは「tsukatte」と促音便化している。なお、漢字学習書も兼ねるノックス版は、本文の「遣て」に振り仮名を付けていない。巻頭の部首別基礎漢字一覧表を参照して「遣て」という読み方を確認する仕組みになっている。小稿では、漢字表から導き出した語形をカタカナで追加した。振り仮名がなく表内にもない漢字はルビなしのままとし、複数の語形が考えられる場合は併記した(例「善^{ヨイコト}事^{ゼンジ}」「今^コ日^{カイ}」)。

(2) 形容詞連用形のウ音便形と原形の対立のうち「能^{よふ}」と「ゑろふ」は次の資料5にみる事例である。豆腐のおからを買いに行かされた子の話である。

【資料5】奥田頼杖『心學道之話』五編下、九丁裏～十丁表、天保13(1842)年

はじめその母親^{は、をや}が。その子^こを買^{かい}にやる時^{とき}。途中^{とちう}で人^{ひと}に見せぬやうにして

買^かてもどれとでも。いふてやつたものと見^みへますじや是^{これ}が此^{この}江戸^{えど}などで
は。ない事^{こと}で御座^ごりませうが田舎^{いなか}では能^よある事^{こと}で御座^ごります親^{おや}が貧乏^{びんぼう}で
子供^{こども}は多^{おほ}し今日^{こんにち}を喰^くかねると。いふやうな下賤^{げせん}なものは御飯^{ごめし}の足^{たし}に此^{この}豆
腐^ふの雪花菜^{きらぎ}を和交^{あへませ}て喰^くて居^ゐると。いふやうなものが幾^{いく}等^らも。ある事^{こと}で御
座^ごりますが其^{その}やうなものの癖^{くせ}に。その雪花菜^{きらぎ}を買^{かう}ことを。ゑろふ人^{ひと}に耻^{はぢ}
るで御座^ごりますじや。

3行目「田舎^{いなか}では能^よある事^{こと}で御座^ごります」のウ音便「能^よ」が、ノックスとイン
プリーの本文^{ひん}では非音便・原形^{もとがた}の「能^よく／yoku」になっている。また最後
の文の「ゑろふ人に耻^{はぢ}るで御座^ごりますじや」の「ゑろふ」も原形^{もとがた}の「えらい／
erai」になっている。しかし、この言い換えた「えらい」自体も「Kore!
Chōkichi! Anata wa erai hashiru ga」のように西日本型の副詞^{ふしじ}的用法である。
そのため他の箇所では「ゑろふ」が別の表現「餘程^{よほど}の／yohodo no」になっ
ている。例えば「Oya ga yohodo no bimbō de」の下線部は、奥田の「ゑろふ」
に相当する。

(2) 形容詞^{けいようし}の第3例「なふ」と「なく」の違いは「nani hitotsu fusoku naku
fubo yori umi-tsukete morai」にみられる。これは奥田の「なふ」に相当する。

(3) 打ち消しの「ぬ」と「ない」の差異は、奥田の「母親^{はは}はモウ氣^{いき}がたまら
ぬから」に対する、ノックス「たまらなくなつたから」、インプリー「tamaranaku
natte kara」のような例にみられる。

5. 『心学道の話』3種テキスト間にみる脱上方化の事例

奥田、ノックス、インプリーの3者に共通する9話を比較すると457件の相
違点^{ちがひ}が見つかる(詳細は松本2017b付録③参照)。相違は、ノックスとインプリー
が同じ形で、奥田と異なる場合が多いが、インプリーだけが他と違っていたり、
三者三様の表現になっていることもある。これら457件を、東西の表現対立と
いう観点から分類し、(a) 西日本型の表現を取り入れた事例5件、(b) 逆に西
日本型から東日本型への言い換え60件、(c) 東西対立と切り離して考えられ
る中立的な392件の3種に大別した。次頁の資料6に (b) と (c) の下位分類
と件数を示した。本節で (a) と (b)、次節で (c) を扱う。

(a) 奥田に「じや」がない箇所^{ところ}で、ノックスとインプリーが「じや」を用い
た事例^じが5件ある。これらは9話中インプリー版でいう「The river of nature」
に3件と「In puris naturalibus」に2件あり、出現^{しげ}が偏^{ひとへ}っている。「とんと覺^{おぼ}
えない事^{こと}ゆへ」の「事^{こと}」の次に「じや／ja」が入っていたり、「生死^{せいじ}は元来^{ぐわんらい}一
つ

理のものなる事^{こと}を御^ご合^が点^{てん}なさるがよい」の「ものなる事^{こと}を」が「もの^{こと}じやといふ事^{こと}を／mono ja to iu koto wo」になっていたりする。理由は不明だがノックスとインブリーが1842年刊でない未確認の異版を底本とした可能性も考えられる。

【資料6】『心学道の話』共通9話3種間にみる相違点、総計457件内訳

- | | | | |
|----------|---------|-------------|------------|
| (a) 上方化 | 5件 1% | (c) 中立的 | 小計392件 86% |
| (b) 脱上方 | 60件 13% | (c1) 別語での換言 | 85 |
| (b1) 動詞 | 19 | (c5) 縮約形→原形 | 19 |
| (b2) 形容詞 | 9 | (c2) 追加 | 38 |
| (b3) 打消し | 4 | (c3) 削除 | 60 |
| (b4) ほか | 28 | (c6) 音声 | 50 |
| | | (c7) 表記 | 18 |
| | | (c8) イル→オル | 29 |
| | | (c9) 促音→直音 | 22 |
| | | (c10) ほか | 39 |
| | | (c11) 直音→促音 | 4 |

(b) は脱上方化つまり西日本型の表現から離れて東日本型の表現に移る動きとして捉えられる。これらを先の資料4とからめて下位分類したのが、資料6内の (b1) ～ (b4) である。各下位項目を順に検討していく。

(b1) 動詞のうち7件はウ音便と促音便の相違である(資料4の2件を含む)。具体的には「いふて／云て／itte」や「合ふて／合て／atte」などである(「奥田／ノックス／インブリー」の順)。次に原形と促音便の相違には「まいりて／まゐつて／maitte」や「向て／向て／mukatte」など8件がある。これと逆方向の動きであるが、促音便が原形になる「かつて／借て／karite」も脱上方化に含めた。いま東京で「借りて／買って」というところを、西日本の一部では「借って／買うて」という(柳田2010: 56)。もし東京に「借って」が定着していたら「買って」との混乱がおきるところだった。以上のほか、文語的な「馬鹿にせられる」と口語的な「馬鹿にされる／baka ni sareru」の対応や、二段と一段活用動詞の対応例「覺ゆる／覺る／oboeru」をここに含めた。

(b2) 形容詞には「思ひたうて／思度て／omoitakute」のようなウ音便と非音便の相違8件(資料4の3件を含む)のほか、文語形「淺間敷／asamashii」の相違1件を加えた。

(b3) 打ち消しに関するものは、資料4に例示した「母親はモウ氣がたまらぬから／……たまらなくなつたから／... tamaranaku natte kara」のほかに、「風もひかぬひかぬ／風でもない／kaze de mo nai」も典型的な例として挙げられる。さらに「ござらい／御座らぬ／gozaranu」と「かひおらず／買ずに／kawazu ni」もここに含めた。「御座らぬ」と「買(わ)ずに」は「ない」を

含まないが、上方的な「ござらい」や「かひおらず」に比べ、標準化の進んだ「ぬ／ず」とみられる。

(b4) その他28件のうち過半数を占める17件は伝聞の「げな」に関する事例である。「げな」は例えば「あつたげな／有たさうだ／atta sō da」のように「そうだ」と対応したり、「といふたげな／といひました／to iimashita」のように「げな」(に相当する伝聞の表現)が消えていたりする。このほか西日本型表現の使用回避例として「くるといふて／来て／kite」「いふて／いひ中て／iatete」「しをる／する／suru」をこの部類に含めた。さらに「ゑろふ／餘程の／yohodo no」「正眞／正眞／shōshin」「正眞／正眞／hontō」も脱上方化とみなした。また合拗音の消滅3例「寛文／寛文／Kambun」「正月／正月／shōgatsu」「三月／三月／san gatsu」もこの部類に加えた。

西日本型表現から離脱する脱上方化の事例は、60件にのぼるが、相違点全体の457件からすると、比率はわずか13%にすぎない。言語規範の新旧(東西)交代は、この数値を見るかぎり、教材内で最小限度にしか扱われていない。

6. 『心学道の話』3種テキスト間に見る中立的な相違点

既述のように、奥田とノックスとインブリーの差異の多くは、表現の東西対立と関連が薄い。これら中立的な相違点、下位8分類の具体例を下に示す。

【資料7】中立的な相違点の実例「奥田頼杖／ノックス／インブリー」の順

(c1) 別語「往かと思やア戻る／往かと思へば歸る／kuru ka to omoeba kaeru」

(c2) 追加「言かと思やア／物言かと思へば／Mono iu ka to omoeba」
削除「氣がたまらぬから／たまらなくなつたから／tamarkanaku natte kara」

(c3) 硬化「よい事／善事／zenji」「非／非／hi」「天地の間／天地間／tenchikan」

軟化「種々／種々／iroiro」「今日／今日／kyō」「是が／是が／Kori ya」

(c4) 促音→直音「やつぱり／矢張／yahari」「ばつかり／ばかり／bakari」

直音→促音「合点／合點／gatten」「一寸／一寸／chotto」

(c5) 縮約→原形「こりや／是は／Kore wa」「そんなら／夫なら／Sore

- nara」
 (c6) 音声「洗濯／洗濯／sentaku」「ゆけ／行け／ike」「大分／大分／daibu」
 表記「エ、能いふてでないノ／エ、得いふてでない／Ei! yō iute de nai.」
 (c7) イル→オル「座居るのぞ／坐居のか／suwatte oru no ka?」
 (c8) ほか「……といひましたれば／……と云ますと／... to iimasu to」

全体を眺めると、ある共通の志向性に気づく。まず(c7)の「～ている」から「～ておる」への動きを旧来の表現に回帰する現象と見れば、資料6(a)の上方化に分類することもできる。新たな標準である「～ている」に抗して、かつて標準的であった「～ておる」に戻る守旧的な姿勢の表面化である。(c4)促音から直音への動きと、(c5)縮約形から原形への動きも、保守化の傾向と見ることができる。話し言葉そのままの促音「やっぱり／ぱっかり」を直接文字に写すのではなく、語形を整え、口語体とはいえ文面にふさわしい「やはり／ばかり」を採用しようとする姿勢である。同じく「こりゃ／そんなら」から「これは／それなら」への整形も、実際に口に出した崩れた縮約形でなく、書き言葉の口語体として、文面の体裁を整えたいという意識が働いたのではないか。(c4)は、促音から直音への動きが22件あるのに対し、逆方向の直音から促音は4件にすぎない。(c5)縮約形から原形への動きとあわせて考えると、文面を整えようとする志向が共通する。さらに(c3)語彙の硬化つまり和語から漢語への動きも同じく文字化に際しての気持ちの改まりと見ることができる。

奥田版『心学道の話』が語ったままの写実的な筆録を旨とするのに対し、ノックスとインブリーの版はあくまでも日本語の教材である。話し言葉としての自然さも大切だが、学習者が見習うべき標準モデルを盛り込む必要がある。旧来の規範に逆戻りしたように見えるのは、教育的な配慮によるものであろう。

7. 注釈における上方語と東京語の捉え方、刊行時期による異なり

この節では心学道話を加工した教材における上方語や東京語への言及に注目し、オニール、インブリー、イビーの順に、各教材編者の言語観を探っていく。

オニールは1874(明治7)年刊 *Kiu-o Do-wa. Ni no Jo.* の序文4節で「The Kiu-Ō Dō-Wa are written in the spoken language of the Central Provinces.」と述べ上方語を中央の話し言葉と捉える。また、話し言葉で頻繁きんねんみせにおこる省略表現を補う語句に、かれは鳩翁と同じ上方表現を用いる。例えば「近年店のものど

もが、仮^{かり}初^{そめ}にも引^{ひき}負^{おひ}をいたして。五拾兩はまゝよ。七拾兩はまゝよ^{ねん}。年々^{ねんねん}帳^{ちやうめん}面の明^{あき}キ。能^ようおほしめして御^ごらうじませ。」(和本14丁表5～8行)について「**To** [7]. *Omôte, thinking, is understood.*」と脚注し「と」のあとにウ音便の「おもふて」を補って読むよう助言している(英文27頁の脚注、[7]は和本7行目をさす)。同じように「女房^{にようぼう}を叱^{しか}れば。他人^{たにん}じやと思^{おも}ふてひとりむごう。つらうさつしやると。恨^{うら}み。」(和本15丁裏2～3行)については「**To** [3, 5 and 8]. *Iute, saying, is understood.*」と注記し(30頁)、省略された「いふて」を補っている。

インブリーの「心学道の話」は1889(明治22)年刊 *Handbook of English-Japanese Etymology*. 第2版の最終章(Imbrie 1889: 213–287 第XI章)をなすものである。この日本語文法書の初版(Imbrie 1880)はもともと第X章までしかなく、第XI章の SELECTIONS (from the *Shingaku Michi no Hanashi*, with a translation and notes.) は第2版への増補改訂に伴って新たに加えられた。

インブリーは、前のオニールが省略語句を上方語で補ったのと対照的に、東京語で省略語句を補いながら学習者の理解を促している。例えば「hito ni hito no michi wo okonawashite yaritai to, iroiro no hōben wo o tate nasareta mono ja.」(284頁)という本文に関して「*Yaritai to: yaritai to omotte.*」(287頁)と注記し「と」のあとに促音便の「おもって」を補って読むよう教えている。同様に「*“Hai Sayōnara itte sanjimashō” to. Nani ge naku dete ikō to suru to, ...*」(229頁)には「*To: to itte.*」(232頁)と注記し「と」のあとに促音便の「言って」を補っている。さらに「Sono kama ya shakushi wa o kama jano o shakushi jano iya o oke jano o fukin jano to iwaruru yue, ...」(280頁)には「*Jano (in Tōkyō dano) iya: often employed in enumerating a list of things.*」(285頁)と注記し、上方の「じやの」を東京の「だの」に言い換えて説明している。前のオニールと対照的に、インブリーは東京に基軸を据え、上方から距離をとって客観的に観察していることがわかる。

Handbook of English-Japanese Etymology. 初版が1880年に出版されて間もなく、サトウによる書評が *The Chrysanthemum*. の1881年1月号と2月号に分けて掲載された(Satow 1881)。その中に「The dialect employed in Mr. Imbrie's work is throughout that of Tokio」というくだりがある(52頁)。インブリーが全面的に東京語を採用したというサトウの評言は、小稿の観察と一致する。

イビーも1881(明治14)年刊 *Kiuō Dōwa: Ichi no Jō*. で上方語を東京語に言い換えている。例えば「Konnichi ono-ono sama ni o hitori-bitori o me ni kakarai demo, ...」(3頁)という本文に対して「*kakarai, Kyoto for kakaranai. In the same manner the na of the negative is often dropped ...*」と注記し、京都では「か

からない」等の「な」が落ちて「かからい」になりがちだと説明している。同じく1892（明治25）年の増補版 *Kyūō Dōwa: Ichi no Jō and Ichi no Ge.* でも、本文「Oya wa kandō shitomunōte naranu keredomo, ...」（16頁）に、注釈「*shitomunōte* = *shitō nōte* = *shitaku nakute.*」（51頁）をつけ、上方語を東京語に言い換えて説明している。

また VOCABULARY 欄で動詞を扱うときイビーは、例えば「Shitagai, -au or -ō, -atta or -ōta, i.v. *To follow.*」のように東西両活用形をしばしば併記する。本例の場合、連体形の見出し項目「Shitagai」のもと、終止・連体形の東西2形態「(shitag)au / (shitag)ō」と、いわゆるタ形についても促音便とウ音便の2形態「(shitag)atta / (shitag)ōta」を示している。合計4種類の活用形態を列記するア・ワ行（文語ハ行）動詞は、VOCABULARY 欄全体で15件見られる。そのうち14件までが上の「従ふ」と同じ、東日本型の「-au / -atta」が先行し、西日本型の「-ō / -ōta」が後続する並び方である（14件中13件は1881年と1892年の両版にあり「かまふ」1件は1881年版にだけ掲載）。4形態の並び順が唯一異なる例外は「Azawarai, -au or -ō, -ōta, -atta, t.v. *To laugh in scorn.*」で、タ形が逆順の「ウ音便、促音便」という並び方になっている。また「言ふ」は、終止・連体形の非音便とウ音便が同形のため「Ii, iu, iuta or itta, i.v. *To say; speak.*」のように、見出し項目「Ii」の次に「iu, iuta or itta」の3形態だけが示されている。タ形の並び方は上の「あざ笑ふ」と同じ「ウ音便、促音便」の順で例外的である。

なお4形態すべては示さないア・ワ行（文語ハ行）動詞では、ウ音便だけを掲げて、促音便を省く事例も見られる。「疑ふ／奪ふ／振るふ」の3語は1892年刊の増補改訂版で VOCABULARY 欄に新しく追加されたが「疑った／奪った／振るった」の提示はない。また「整ふ」は、促音便の提示がない旧版の記述をそのまま引き継いでいる。さらに「思ふ／向かふ」の2語は、もともとあった「思った／向かった」が改訂版で消え失せ、ウ音便だけになった。

第3節の資料2で確認したとおり、イビー自身はウ音便の使用に消極的であった。しかし、次の第8節で述べるように、世間一般におけるウ音便の威勢はなお存続していると捉えていた。自己の基準点を東京に置きつつ、イビーは東西両勢力の拮抗ぶりを冷静に俯瞰していたようである。

1874年のオニール版、1881年のイビー版、1889年のインブリー版を時系列に通覧すると、言語の比重が西から東へ移行していく過程が垣間見えてくる。上方語を日本の中心の言語とみなすオニール、東西を視野に入れつつ自らは東京語を主用するイビー、東京語を自分の言葉として専用するインブリー。心学道話の上方表現に向けた3人のまなざしは決して一様ではなかった。

8. 東西二重規範から東京一極集中化へ

1881年にイビーは月刊誌 *The Chrysanthemum*. に「On Writing Japanese in Roman Letters.」と題するローマ字表記法を5回にわたって連載した（5・6・7・8・11月号、通巻157-62, 204-09, 259-63, 304-08, 441-45頁、URLは参考文献Satow 1881参照）。連載の序盤6月号で東京語の優位性に触れ「Tokio is not only the political capital, but also the intellectual heart of the nation, and Tokio speech is already and will increasingly become the typical dialect of Japan.」（207頁）と述べている。

連載の終盤となる8月号と11月号は「The manual for transliterating Japanese.」と副題のあるローマ字表記法の具体的な手引きである。8月号序文で「In the following Manual there are occasionally two spellings given, the reason being that in those places there are two distinctly recognized, and according to circumstances, equally correct pronunciations.」（304頁）と前置きしている。ある語は状況によって2つの異なる形をとるが両方とも同等に正しい発音だと説明する。具体例一覧から文語ハ行（口語ア・ワ行）四段活用動詞全9件を下に抜き出す（307-8頁Section IIより、2種に分類し五十音順に並べ替えた）。

- (i) ア ガ ナ フ aganafu = aganau or aganō, *to redeem*. / ウ バ フ ubafu = ubau or ubō, *to take away*. / ウ ヤ マ フ uyamafu = uyamau or uyamō, *to honour*. / テ ツ ダ フ tetsudafu, tetsudau or dō, *help*. / ハ フ hafu = hau or hō, *to creep*.
- (ii) ア フ afu = ō or au, *to meet*. / コ フ ko-fu = kō or kou, *to desire*. / シ タ フ shitafu = shitō or shitaui, *to desire*. / モ ラ フ morafu = morō, morau, *to receive*.

(i) は2形態のうち原形（非音便）の提示が先行しウ音便が後続する事例、(ii) は逆にウ音便を先に挙げる事例である。提示順の統一はとれていない。しかも、もとの誌面では両者区別なく、動詞以外の諸例の中に混在している。(i) の5語と、(ii) の4語は、語数としてはほぼ半々といってよい。つまり非音便とウ音便の優先順位には無頓着であるように見える。どちらの形をとるかは状況（304頁 according to circumstances）と文体（307頁 the style of literature）によるそうだが、選択の手がかりとなる具体的な説明はない。

両形とも正しいとする前置きと、具体例の両形混在とを考えあわせると、1881（明治14）年当時、まだウ音便形が広く残存していたことがうかがわれる。

1880年代前半のイビー『眞の生命』でもウ音便がわずかに観察された(資料2)。しかし本節ははじめの引用にあったように、イビーは東京語のさらなる伸展と上方語の衰退を予見していたのである。

東京語を上方語に代わる新たな標準モデルとみなす言説は、イビーに限らず、ヘボンの『和英語林集成』第3版(Hepburn 1886)序文「Dialects」の節や、アストンの *A Grammar of the Japanese Spoken Language*. 第4版(Aston 1888)序文、チェンバレンの *A Handbook of Colloquial Japanese*. 第3版(Chamberlain 1888)第1章の序文にも見られる。

アストンは自身の口語文法書を、第3版(1873年刊)から第4版に改訂するにあたり大幅に書き換えた。第3版ではハ行動詞の音便を、下のように東西両形で併記し、江戸・東京の語形を先に示しながら、解説していた(Aston 1873: 38)。

Shimai-te becomes *shimatte*. (Yedo dialect.)
shimōte. (Western dialect.)
Omoi-te becomes *omotte*. (Yedo dialect.)
omōte. (Western dialect.)

しかし第4版では、東日本型だけを提示し、また「Yedo/Tokyo dialect」という断り書きもなくした(Aston 1888: 46)。西日本型の表現が文法書から姿を消したことは、学習対象の標準モデルから外れたことを意味する。初版では下のように西日本型が先行する逆順の提示であった(Aston 1869: 21、渡邊1982)。

Shimai-ta becomes *shimōta*. (Western dialect.)
shimatta. (Yedo dialect.)

幕末維新时期まで日本の中央語として標準モデルの筆頭に掲げられていた上方語が、明治の初期に江戸・東京語へ首位の座を譲り渡し、明治の中頃には一地方語へと降格していった経緯が、語学書の改訂からたどれる。

アストンの文法書はまた、1869年の初版以来、序文で『鳩翁道話』などの心学書を、日本の中心地の口語(the spoken dialect of the central provinces of Japan)で書かれた面白い読み物として推奨してきたが、金沢(2013: 171)が指摘するように、この記述も第4版で姿を消した。

9. 東西の表面的な断絶と、基底をなす共通要素

チェンバレンも自身の口語文法書のなかで、東京語のさらなる優位性の伸展に言及している。「the dialect of Tokyo (itself a slightly modified form of the Kyoto dialect, which was formerly considered the standard Colloquial) has gained an ever-increasing importance and preponderance, as the general medium of polite intercourse throughout the country.」(Chamberlain 1888: 8)。引用の最後にある、日本全国どこでも通じる丁寧な言葉遣いとは、今でいう共通語にほかならない。しかしそれ以上に、この言説で特に注目したいのは前半括弧内の記述である。東京語は、それまで標準的な話し方と見られていた京都語をわずかに改めたものである、とチェンバレンは事もなげに言う。両者の表層的な差異にだけ目を奪われると、言語規範の新旧交代は、連続性のない断絶に見える。しかし、深層の共通部分に目を向ければ、連続性のある継承であることを洞察しているのである。

先の第5節では、奥田、ノックス、インブリーそれぞれの『心学道の話』を見比べた。奥田が上方表現を使っていながら、ノックスとインブリー（の両方もしくは片方）が上方表現を使わない、脱上方化といえる相違点が、全457件中60件あった。しかし比率としては全体の1割強に過ぎない。9割弱を占めるのは表現の東西対立と切り離して考えられる中立的な相違点であった。

また第7節では、オニール、イビー、インブリーの各教材編者による、東西両表現への言及を検討し、教材の刊行時期によって認識が異なることを確認した。しかし注釈全体から見ると、東西両表現への言及は、やはり多くない。

つまり、第5節で見た本文においても、第7節で見た注釈でも、東西両表現の扱いは量的に限られている。要注意な上方表現にさほど注意が払われていないようにも見える。それでいて、第3節で検討したように、明治前期の講義物は、幕末の心学道話と異なり、上方語の特徴が大幅に薄れている。

いかにして過去の素材から未来に通じる新しい標準的なモデルを得ることができたのか。この疑問が小稿の出発点であった。

東西の表現差は表層的に過ぎない、というチェンバレンのような達観があれば、たとえ上方表現を多く含む素材を用いても、その根幹にある東西共通の標準的な日本語の習得には大きな支障とならない。表層の違いに惑わされることなく、本質を見抜く見識が、新時代にふさわしい言語形式の吸収を可能にしたのであろう。

参考文献

- イービ, チャールス (1884) ^{まことのいのち}『眞之生命』倫敦聖教書類会社
〈https://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/image/04-honbun-pdf/190485629_web/190485629_web.pdf〉
- 奥田頼杖／講話、平野橘翁／聞書 (1842)『心學道之話』江戸：花陰堂
〈http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/?page_id=462〉
- 金沢朱美 (2013)「アーネスト・サトウ、ウィリアム・アストン、ジョン・オニールらが使用した日本語学習書の一考察：『鳩翁道話』を中心に」加藤好崇ほか編『日本語・日本語教育の研究：その今、その歴史』スリーエーネットワーク
- 金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の世界』岩波書店
- 柴田鳩翁／著、柴田武修／聞書 (1834)『鳩翁道話』京都：北村太助
〈<https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/106092>〉
- 古田東朔 (1987)「『東海道四谷怪談』において上方風の言葉遣いをする人たち」近代語学会『近代語研究』第7集437～458頁、のち同 (2012)『古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション 第1巻 江戸から東京へ 国語史1』くろしお出版43～62頁に所収
- 松本隆 (2017a)「Charles Eby『眞の生命』と柴田鳩翁『鳩翁道話』：キリスト教と心学の説教における喩えの比較」清泉女子大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所年報』第25巻27～48頁
〈https://seisen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=963&item_no=1&page_id=25&block_id=29〉
- 松本隆 (2017b)「心学道話を素材にした明治前期の日本語学習資料：英米人4名によるテキスト5種の紹介」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『日本研究センター教育研究年報』第6号、本文68～73頁、付録74～268頁
〈https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2017_Matsumoto_a.pdf〉
- 森岡健二 (1980)「口語史における心学道話の位置」国語学会『国語学』第123輯21～34頁 〈http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/view.php?h_id=1230210340〉
- 森岡健二 (1991)『近代語の成立：文体編』明治書院
- 柳田征司2010『日本語の歴史1：方言の東西対立』武蔵野書院
- 山口豊 (1965)「近代後期上方語資料としての『鳩翁道話』について」近代語学会『近代語研究』第1集241～254頁
- 渡邊修 (1982)「アストン『日本口語文典』初版影印：解説」大妻女子大学『大妻女子大学文学部紀要』第14号39～63頁
〈https://otsuma.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3562&item_no=1&page_id=29&block_id=56〉
- Aston, William George (1869) *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*. Nagasaki: F. Walsh. (渡邊修1982に影印掲載)
- Aston, W. G. (1873) *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language. Third Edition*.

- London: Trübner & Co. (in *The Western Rediscovery of the Japanese Language, Volume 6*, edited with an introduction by Stefan Kaiser. Richmond, Surrey: Curzon Press, 1995.)
- Aston, W. G. (1888) *A Grammar of the Japanese Spoken Language*. Yokohama: Lane, Crawford & Co.; London: Trübner & Co.
〈<https://archive.org/details/grammarofjapanes00astorich>〉
- Aston, W. G. (1899) *A History of Japanese Literature*. London: William Heinemann.
〈<https://archive.org/stream/historyofjapanes00astouoft#page/n11/mode/2up>〉
- Chamberlain, Basil Hall (1888) *A Handbook of Colloquial Japanese*. London: Trübner & Co. 〈<https://archive.org/details/handbookofcolloq00chamrich>〉
- Eby, Charles Samuel (1881) *Kiūō Dōwa: Ichi no Jō. A Japanese Sermon Transliterated and Annotated with Vocabulary*. Yokohama: Kelly & Co. 東洋文庫蔵本
- Eby, C. S. (1892) *Kyūō Dōwa: Ichi no Jō and Ichi no Ge, with Vocabulary*. Tokyo: Z. P. Maruya & Co. 国立国会図書館蔵本
- Hepburn, James Curtis (1886) *A Japanese-English and English-Japanese Dictionary. Third Edition*. Tōkyō: Z. P. Maruya & Co. ゼー・シー・ヘボン『改訂増補 和英英和語林集成』丸善商社書店 〈<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/>〉
- Imbrie, William (1880) *Handbook of English-Japanese Etymology*. Tōkiyō: R. Meiklejohn & Co. 〈<https://archive.org/details/handbookenglish00imbrgoog>〉
- Imbrie, W. (1889) *Handbook of English-Japanese Etymology. Second Edition*. Tokyo: Z. P. Maruya & Co. 〈<https://archive.org/details/handbookofenglis00imbrriich>〉
- Knox, George William (1882) 『心學道の話』出版者不明、青山学院大学図書館蔵本
- Mitford, Algernon Bertram (1871) *Tales of Old Japan*. London: Macmillan & Co.
〈<https://archive.org/details/talesoldjapanwi00mitfgoog>〉
- O'Neill, John (1874) *A First Japanese Book for English Students. (Kiu-o Do-wa. Ni no Jo.)* London: Harrison & Sons.
〈<https://books.google.co.jp/books?id=j0ARAQAAlIAJ&hl>〉
- Satow, Ernest Mason (1881) "Notices of Books. *Handbook of English-Japanese Etymology*. By William Imbrie (Tokio 1880)." in *The Chrysanthemum, A Monthly Magazine for Japan and the Far East*. Volume I : 16-22, 45-52.
〈<https://books.google.co.jp/books?id=rbcRAAAAYAAJ&hl>〉
- Satow, E. M. (1921) *A Diplomat in Japan*. Philadelphia: J. B. Lippincott Company.
〈<https://archive.org/details/adiplomatinjapa00satogoo>〉
- アーネスト・サトウ著、坂田精一（1960）訳『一外交官の見た明治維新』岩波文庫